

看護学生のライフコース観に関する研究 －学生の志向および母親のライフコースとの比較－

高橋 明美¹⁾

要 旨

本研究は、看護専門職を目指す看護学生に対し、子どもへの興味と将来の結婚、子育て、就業形態について調査し、どのようなライフコースを志向しているのかを明らかにし、さらに、学生が小さい頃の母親の就業形態と学生が希望するライフコースとの比較を行ったものである。結果、「子どもが好き」と回答した者は81%で、子どもを好きな学生全員が将来子どもを持ちたいと回答した。結婚については、72%が将来結婚したいと考えていた。将来の子育てについて、「子どもが小さい時は家庭に、大きくなったら働く」と「育休はとるが働き続ける」を合わせると81%で多くの学生が職業志向的なライフコース観を持っていた。また、学生が子どもの頃母親が専業主婦であった者と常勤労働者であった者とを比較したが、子どもである学生は、いずれも職業継続希望者が80%近くであり、両者に有意差は認められず、母親のライフコースに影響されることなく、多くが職業志向的なライフコース観をもっていた。

キーワード：ライフコース、結婚、子育て、職業志向、家庭志向

I 緒言

わが国では、若者の未婚化・晩婚化が進行しており、これらが少子化の要因となっている。また、若者が結婚を避ける理由として、学歴、労働環境、経済的要因を挙げる調査結果もある¹⁾。さらに、被養育過程における経験などが結婚や出産に対する考え方に影響を及ぼしているという²⁾。若者のライフコース観についての研究^{3) 4)}では、「女性は家庭を優先するといった伝統的な役割分業を支持する者ほど、結婚後は家庭志向的なライフコース観を持ち、もっと女性が社会進出を果たすべきという価値観をもつ者ほど、職業志向的なライフコース観を持つ」という。

看護学生は、看護師になるという明確な目標を持っている。筆者の研究⁵⁾では、看護学校への入学動機として一番の理由は「一生働き続けられる仕事だから」であった。「給料が良い」「就職率が高い」も重複して挙げており、看護師の資格は、将来の自己実現および経済的安定につながると考えていた。

したがって、看護学生は自己の将来について職業志向的なライフコース観を持つと考えられる。

そこで、看護専門職を目指す看護学生に対し、子どもへの興味と将来の結婚、子育て、就業形態について調査し、どのようなライフコースを志向しているのかを明らかにしたいと考えた。また、学生の母親のライフコースと比較し、学生が小さい頃、母親が専業主婦であった者と母親が常勤労働者であった者との間で、家庭志向と職業志向に差が出るのではないかと仮説を立て実態を調査したので報告する。本研究におけるライフコース観とは、学生が将来理想とするライフコースのことであり、結婚・子どもを持つことを選択および子育てと就業形態のことをいう。

II 研究目的

看護学生のライフコース観を調査し、さらに、学生が子どもの頃の母親の職業と比較し、看護学生が将来のライフコースをどのようにとらえているのかを明らかにする。

1) 川崎市立看護短期大学

Ⅲ 研究方法

1 研究デザイン

質問紙による実態調査研究

1) 個人属性：性別、年齢

2) 自己の志向するライフコースに関する7の評価項目

各質問項目に対し3～7の選択肢から選び、その他は自由記載とした。

3) 自分の子どもの頃の母親の職業に関する1評価項目7選択肢

2 対象：A看護短期大学2年生 79名

3 データ収集：2011年4月12日、「小児看護概論」の授業開始前に質問紙を配布し、研究の主旨を伝え、回答時間を設定した。回収用封筒を用意し、提出をもって同意とみなした。

4 データ分析：集計と分析はEXCELおよび統計ソフトSPSS (Ver11.5J)を用い、単純集計、クロス集計、 χ^2 検定、一部多変量解析（因子分析）を行った。

5 倫理的配慮

対象者に回答は任意であること、無記名とし、各自封筒に入れ密封することで個人が特定されないこと、成績には関係ないことを口頭と紙面にて説明した。結果は次年度の授業に活用することと本学紀要に掲載することと学会発表する旨を伝え了承を得た。また、本学研究倫理審査委員会にて審議され、承諾を得た。(承認番号 2011 - R-1)

Ⅳ 結果

1) 調査票の回収結果

調査票は対象者79名中73名から回収した（回収率92%）。内訳は女性69名、男性4名で、年齢幅は18歳～35歳であった。（表1、表2）

表1 男女内訳

女性	男性	計
69	4	73

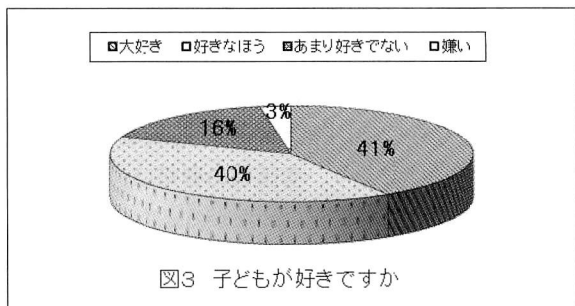
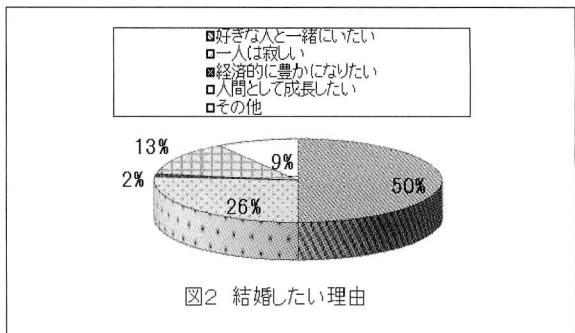
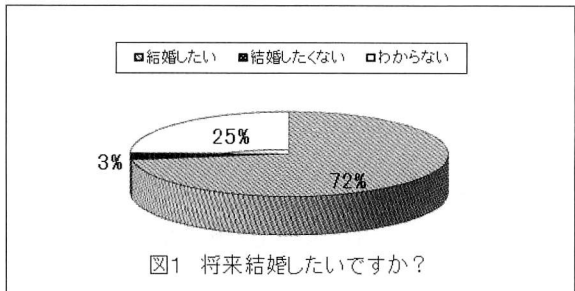
表2 年齢

年齢	18 ～ 20	21 ～ 25	26 ～ 30	31 以上	計
	59	2	5	7	73

2) 各質問項目の結果

(1) 将来結婚したいかという質問に対し、「結婚したい」と回答した学生は53名（72%）、「結婚したくない」は2名（3%）、「わからない」が18名（25%）であり、有意に「結婚したい」が多かった（ $\chi^2=55.918, p < .01$ ）（図1）。

次に、結婚したい理由を聞いた結果、「好きな人と一緒にいたい」が38名（50%）と一番多く、次いで「一人は寂しい」が20名（26%）、「人間として成長したい」が10名（13%）で、「経済的に豊かになりたい」が1名であった（図2）。「その他」を回答した学生は7名（9%）おり、「家族が欲しい」、「親孝行したい」、「幸せになりたい」等の理由であった。一方、結婚したくない、わからないと答えた学生の理由は「将来が的確に想像できない」、「誰かに合わせて生活したくない」、「一人の方が楽」、「メリットがない」、「相手



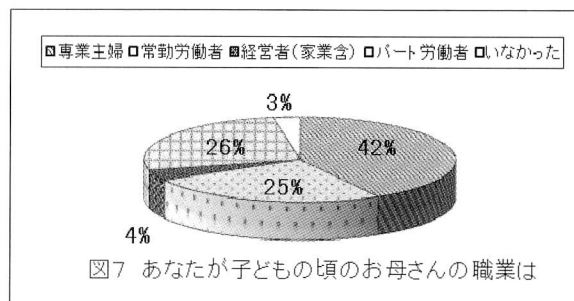
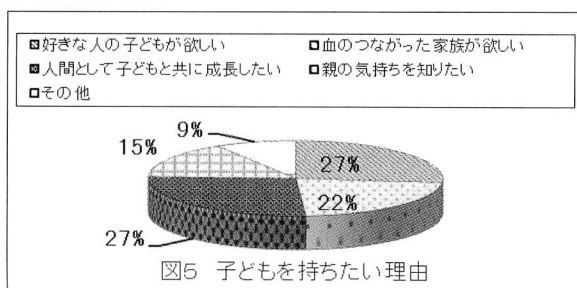
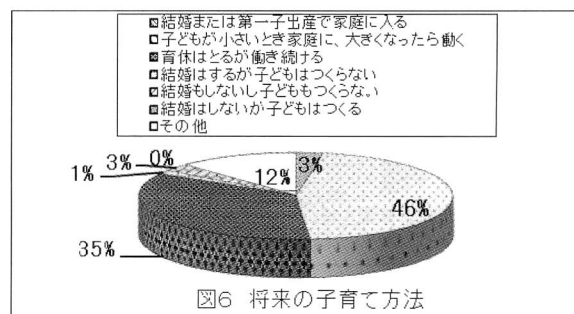
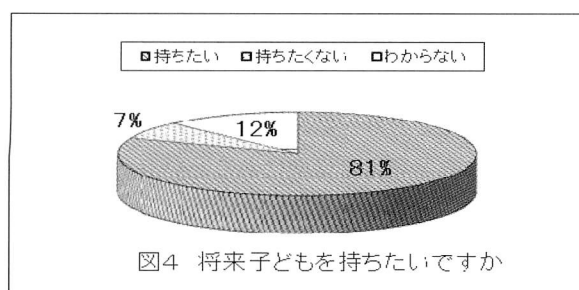
- がない」、「将来の稼ぎ具合による」等であった。
- (2) 子どもの好き嫌いを聞いた結果、「大好き」と回答した学生は30名(41%)、「好きなほう」は29名(40%)で合わせて81%であった。「あまり好きでない」が12名(16%)、「嫌い」と回答した学生は2名(3%)で、有意に「大好き、好きなほう」が多かった(図3)($\chi^2=30.51, df=3, p < .01$)。子どもが好きな理由は、「かわいい」、「癒される」、「幸せな気分になれる」等であった。子どもが嫌いな理由では、「どう接してよいかわからない」、「行動パターンが読めない」、「うるさい」等であった。
- (3) 将来子どもを持ちたいかという質問に対し、「持ちたい」と回答した学生は59名(81%)、「持ちたくない」が5名(7%)、「わからない」が9名(12%)で有意に「持ちたい」が多かった(図4)($\chi^2=74.411, df=2, p < .01$)。

また、子どもを持ちたいという理由では、「好きな人の子どもが欲しい」と回答した学生が24名(27%)、「血のつながった家族が欲しい」が20名(22%)、「人間として子どもと共に成長したい」が24名(27%)、「親の気持ちを知りたい」が14名(15%)、「その他」が8名(9%)(図5)で、その理由は「子育て出来るか不安だけど子どもが欲しい」、「子孫繁栄のため」、「親に孫を見せたい」等であった。

さらに、子どもが好きと回答した学生との

クロス集計の結果、全員が「子どもを持ちたい」と答えていた。逆に「子どもを持ちたくない」、「わからない」と回答した学生の理由は、「育てる自信がない」、「自分に子どもが出来るなんて想像できない」、「子どもを幸せにできる自信がない」、「自分自身の世話で一杯」「独身貴族を楽しみたい」等であった。

- (4) 将来の子育て方法についての質問に対し、「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と回答した学生が33名(46%)、次いで「育児はとるが働き続ける」が25名(35%)、「結婚または第一子出産で家庭に入る」が2名、「結婚はするが子どもはつくらない」が1名、「結婚もしないし、子どもも作らない」が2名(3%)、「結婚はしないが子どもはつくる」が1名、「その他」が9名(12%)であり、81%の学生が子どもを持っても働くことを希望していた(図6)($\chi^2=100.082, df=6, p < .01$)。「その他」の理由では、「結婚相手によって変化する」、「経済状況をみてケースバイケースで」、「今は考えていない」等であった。
- (5) 学生の子どもの頃の母親の職業を聞いた結果、「専業主婦」と回答した学生が30名(42%)、「常勤労働者」が18名(25%)、「経営者(自営含む)」は3名(4%)、「パート労働者」は19名(26%)、「母親がいなかった」が2名(3%)であった(図7)



($\chi^2=38.97, p < .01$)。

3) 回答者が子どもの頃の「母親の職業」と回答者の「将来の子育て方法」とのクロス集計結果

回答者が子どもの頃母親が専業主婦の場合 (30名) では、「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と回答した学生が16名 (54%)、「育休はとるが働き続ける」が7名 (23%)、「結婚または第一子出産で家庭に入る」が2名 (7%)、「結婚もしないし子どももつからない」が1名であった。「その他」と回答した学生は4名であった (図8)。

回答者が子どもの頃母親が常勤労働者の場合 (18名) では、「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」、「育休はとるが働き続ける」のいずれも7名 (39%) ずつであった。「結婚はするが子どもはつからない」が1名、「その他」が3名であった (図9)。

母親が専業主婦であろうが常勤労働者であろうが回答に差はなく、「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と回答する学生が一番多く、次いで「育休はとるが働き続ける」であり、有意差は得られなかった ($\chi^2=5.23, df=6, ns$)。

4) 因子分析の結果

将来結婚したいと回答した53名のうち、すべての項目に回答の漏れのなかった学生50名

を抽出し、性別、年齢を含む9項目の回答を集計して因子分析を行った。主因子法およびKaiserの正規化を伴うプロマックス回転にて2因子が抽出され、第1因子を「子育て観」、第2因子を「家族形成結婚観」と命名した (表3)。さらに、回答者個人の第1因子得点と第2因子得点を求め、直行座標にプロットした結果 (図10)、第1因子得点がプラスの学生は子育てに対し「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と回答し、第1因子得点がマイナスの学生は「育休はとるが働き続ける」と回答しており二分されていた。また、第2因子得点がプラスの学生 (図8-----) は「好きな人の子どもが欲しい」と回答し、第2因子得点がマイナスの学生 (図8-----) は「人間として子どもと共に成長したい」、「親の気持ちを知りたい」と回答し、これも二分されていた。すなわち、「好きな人の子どもが欲しい」と回答した学生は、「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と考え、「子どもと共に成長したい」、「親の気持ちを知りたい」と回答した学生は、「育休はとるが働き続ける」と考えていた。

V 考察

1) 将来の結婚・子どもを持つことについて

人口問題研究所の調査⁶⁾によると、いずれは結婚しようという未婚の割合は9割程度で推移しており、結婚願望が決して低くないにもかかわらず、「適当な相手に巡り合わない」、「仕事 (学業) に打ち込みたい」、「経済的理由」などを未婚の理由にしている若者がふえており、結婚することが自己実現のさまたげになると考える傾向にあるという。また、現状は晩婚化、生涯未婚の割合が増加している^{6) 7)}。A看護短期大学学生は、「将来結婚したい」が72%で、結婚願望は前出⁶⁾の結果より低かった。次いで「わからない」が25%、「結婚したくない」が3%であった。結婚したい理由は家族を作りたい願望が主で、「わからない」、「結婚したくない」理由は、将来の予測がつかないことや他人と生活することに抵抗を感じている内容が多かった。前出調査⁷⁾からみると、A看護短期大学学生の場合は、自己実現の妨げになるということと一致しているが、結婚願望については、「今は考えられない」、「将来どうなるかわか

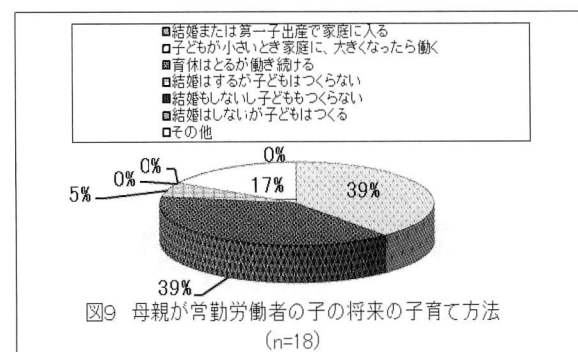
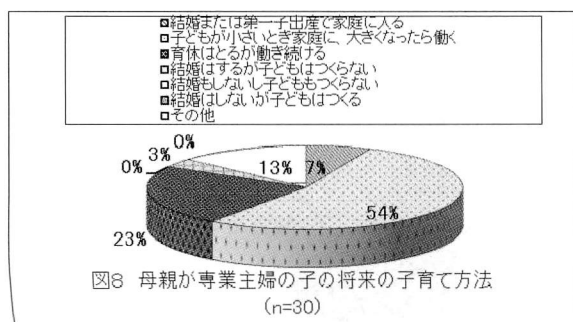


表3 パターン行列

	元データ		再調整	
	因子		因子	
	1	2	1	2
子育て方法	1.328	-0.124	0.959	-0.090
性別	-0.072	-0.017	-0.365	-0.086
年齢	0.288	-0.116	0.285	-0.115
親の職業	0.294	0.118	0.224	0.090
子どもを持ちたい理由	0.318	1.131	0.218	0.776
結婚したい理由	-0.178	0.612	-0.191	0.660
子どもが好き	-0.013	0.186	-0.019	0.279

第1因子名＝子育て観

第2因子名＝家族形成結婚観

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

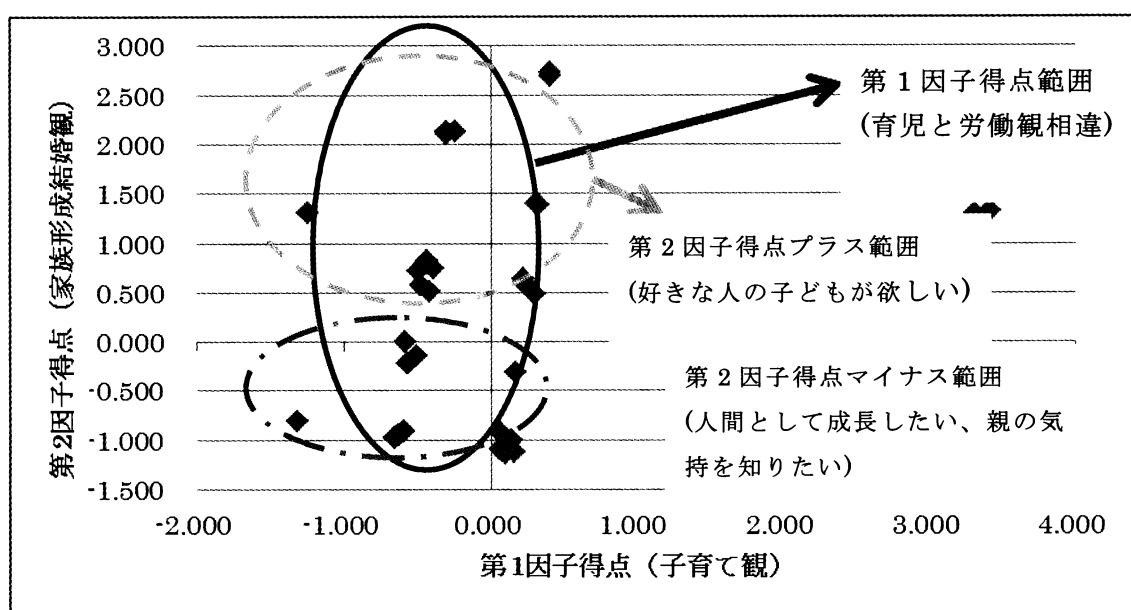


図8 因子得点散布図

らない」など、結婚を現実問題としてとらえ、「わからない」と回答したと察する。

一方、子どもが「大好き」、「好きなほう」という者が81%を占め、将来子どもを「持ちたい」と答えたのが81%で、子どもを好きという者全員が子どもを持ちたいと答えていた。高橋らの研究⁸⁾では、「東日本大震災後、人は結婚すべきであるし、結婚したら子供を持つべきである」という伝統的な考え方が増加し、家庭についての考え方は、夫婦、親子、兄弟姉妹などが愛情を育む場と考える人が増えていた」という。これらは、調査した時期が東日本大震災直後であったため、家族の大切さを国民が感じて

いた時期と一致し、A看護短期大学学生も結婚したい理由の「家族が欲しい」や子どもを持ちたい理由の「血のつながった家族が欲しい」など血縁願望を強く持ったと考えられる。さらには子どもと共に成長し、親となって自分の親の気持ちに近づきたいと答え、子どもを持つことが自己実現につながると考えていた。これは、子どもに対するイメージが肯定的な学生が多く、被養育過程での体験、すなわち母子ともに愛情深く自律を促されて育ったという養育体験の世代間伝達が良好であると予想できる。「若者は結婚や出産、育児について肯定的にとらえられるような体験や情報を得ると、結婚観が肯定的にな

り、否定的な体験や情報を得ると、結婚観に否定的に作用する」と竹原らの研究⁹⁾で明らかにしている。子どもを「持ちたくない」、「わからない」の理由では、「育てる自信がない」や「子どもを幸せにできる自信がない」という答えがあり、被養育過程の問題なのか、子どもを育てる環境の問題なのかは明らかにできなかった。

2) 将来のライフコース観と学生の母親のライフコースとの比較について

清水らの研究¹⁰⁾では、「大学生女子の理想のライフコースは仕事と家庭の両立であり、出産後の復職希望は、看護系学生 60%、女子大生 48%で、看護系学生は全員が結婚・出産後も就業継続の意志を持っているのに対し、出産を機に退職希望者は女子大生では 14%であった」と報告している。さらに、看護系学生は就職や出産、子育てを身近な問題として捉えており、子育て後の再就職や子育て支援にも関心が高かったとしている。また、渡邊ら¹¹⁾は「職場での人間関係を重視する女性ほど、就業継続や一時離職といった仕事に携わるライフコースを選択する」という。

A 看護短期大学の学生は将来の子育て方法について、81%が子どもを持っても働くことを希望していた。結婚または第一子出産で家庭に入ることを希望しているのはわずか3%であり、清水らの結果より就業継続希望者が多かった。A 看護短期大学学生には、就職や経済的安定が自身のキャリア形成と子育てを両立できるという理想のライフコースを進んでいける要因となっていることと、看護という人との関係を重視した職業であることが就業継続希望の多い理由と考えられる。

また、学生が子どもの頃の母親の就業形態と結婚、子育ての希望を聞いた結果では、母親が専業主婦であった学生は結婚・出産を機に家庭に入るという家庭志向の者が多いのではないかと考えていたが、家庭に入ると回答した者はわずか2名であり、79%の者が就業継続つまり職業志向であった。母親が常勤労働者であった者では、家庭志向は0であり、職業志向が78%で、両者に有意差は認められなかった。羽根ら¹²⁾の看護学生に対する研究によると、母親のとした自己のライフコースにかかわらず子どもには再就職コースを望む傾向にあり、子ども自身は再就職コースおよび育休以外は就業継続希望が80%以上で、母親のライフコースおよび母親が子どもに

期待するコースの間には有意差が見られなかったと報告している。A 看護短期大学学生も母親のライフコースに影響されず、多くが職業志向的なライフコース観をもっていた。このことは、学生が結婚や子育てに対し、多様な考えを持っており、専門職者として育っていくためには望ましい結果であるといえる。

3) 将来の結婚・子どもを持つことと就業形態について

将来結婚を希望する学生の回答より因子分析をした結果から、「好きな人の子どもが欲しい」と回答した者は、子育て方法について「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と回答し、「子どもと共に成長したい」、「親の気持ちを知りたい」と回答した者は「育休はとるが働き続ける」と回答していた。これは、「好きな人の子どもを産むこと（夫への愛情）」対「夫や子どもに左右されない人間としての生き方」に分かれていると考えられる。言いかえると、「好きな人の子どもが欲しい」者は、子どもが小さい時は家庭志向であり、大きくなったら働くという職業志向に転換する。「子どもと共に成長したい」、「親の気持ちを知りたい」者は、育休はとるが働き続けるという最初から職業志向を持っていると言える。A 看護短期大学学生は、結婚や子どもを持つことに漠然とした憧れの者と、前出の研究結果¹⁰⁾のように将来を見据え、現実的なライフコースを希望している者へと二分化されていることがわかった。今後 A 看護学生の成長を期待し、看護学の学習が進むにつれ、ベストな自己のライフコース選択ができるよう結婚観、子育て観、看護観を持っていけるような支援・教育をしたいと考える。

4) 研究の限界と今後の課題

今回の調査では、看護学生のライフコース観の内容が、結婚、子ども、将来の就業継続について短絡的な質問項目となり、結婚についての相手への期待や子どもの育て方、仕事に対する考え方などについては調査していないため、結果が単純なものになった。また、対象者は女性が69名で、男性が4名と少なく、男性のみを取り上げて検討できなかった。さらに、既婚者も数名いたがフェイスシートに項目を入れず、自分の独身の頃を思い出して回答してもらったものであり、既婚者もていねいに検討する必要があったと反省する。

これらは、今後の課題であり、授業、演習、実習

の節目に横断的な調査を行っていきたいと考える。

VI 結論

A 看護短期大学学生の自分の将来のライフコース観（結婚・子育てイメージ）は以下であった。

- (1) 結婚について72%の学生が「結婚したい」と志望し、「結婚したくない」と比べ有意であった。
- (2) 結婚したい理由、子どもをもちたい理由は「好きな人と一緒にいたい」、「好きな人の子どもが欲しい」がそれぞれ一番多かった。
- (3) 子どもを「大好き」「好きなほう」と回答した者と、「子どもを持ちたい」と回答した者は、「嫌い」、「持ちたくない」と回答した者より有意に多く、子どもを好きという者が全員「子どもを持ちたい」と答えていた。
- (4) 将来の子育て方法は「子供が小さい時家庭に、大きくなったら働く」が最も多く、次いで「育休はとるが働き続ける」で全体の8割近くを占め、職業志向的ライフコースを志向していた。
- (5) 学生が子どもの頃の母親が専業主婦の場合では、「子どもが小さい時家庭に、大きくなったら働く」と回答する者が多く、「育休はと

るが働き続ける」という回答者では「母親が常勤労働者」であった方が「母親が専業主婦」であった者より多かったが、有意差は得られなかった。ゆえに母親のライフコースに影響されず、将来結婚・出産後も継続して働くという職業志向的なライフコース観を持っていた。

- (6) 「好きな人の子どもを産みたい」者は、子どもが小さい時は家庭志向であり、大きくなったら働くという職業志向に転換する。「子どもと共に成長したい」、「親の気持ちを知りたい」者は、育休はとるが働き続けるという最初から職業志向を持っていた。

謝辞

今回の研究に際し、協力くださった学生の皆様、統計処理に尽力くださった愛知みずほ大学大学院教授加藤象二郎先生、随所で助言をくださった本学教授吉村恵美子先生に感謝申し上げます。

本研究の一部は、第31回日本看護科学学会学術集会（2011.12 高知）および第3回世界看護科学学会（WANS、2013.10、韓国ソウル）で示説発表した。

引用文献

- 1) 「平成25年版厚生労働白書」厚生労働省
- 2) 今村美幸他. 親の子育て体験談を聴くことによる看護学生の子育て観への効果. 日本小児看護学会誌. 第20巻, 第1号, 2011, p.107-112
- 3) 中井美樹. 若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観. 立命館産業社会論集. 第36巻, 第3号, 2000.12 p.117-127.
- 4) 佐野真由他. 大学生における性役割志向によるライフコース観の比較. Yamanashi Nursing Journal. Vol.6, No.1, 2007, p.45-52.
- 5) 高橋明美他. 看護学生の職業選択理由～年齢、入学選抜方法との関連性～. 聖マリアンナ医科大学看護専門学校紀要. Vol.2, 2009, p.41-46.
- 6) 国立社会保障人口問題研究所. 第14回出生動向基本調査. 2010
- 7) 山田昌弘. 少子化社会日本—もう一つの格差のゆくえ. 岩波書店. p.19-21.
- 8) 高橋幸市他. 東日本大震災で日本人はどう変わったか～「防災・エネルギー・生活に関する世論調査」から～. 放送研究と調査. JUNE,2012, p.41-44.
- 9) 竹原健二他. 若者の結婚観と結婚や出産に関する情報や体験との関連. 民族衛生. vol74, no5, 2008, p.237-249.
- 10) 清水尚子他. 大学女子の理想のライフコースと出産・子育て環境に関する意識. 母性衛生. Vol.49, no3, 2008.10. p.208.
- 11) 渡邊ひとみ他. 独身勤労女性のライフコース選択と生活領域からみたアイデンティティとの関連. 母性衛生. 発達心理学研究. 22巻2号, 2011, p.189-199.
- 12) 羽根洋子他. ジェンダーパーソナリティと養育体験の世代間伝達—看護学生のライフコースと職業選択との関連—. 母性衛生. 第41巻, 4号, 2000.12, p.429-437.